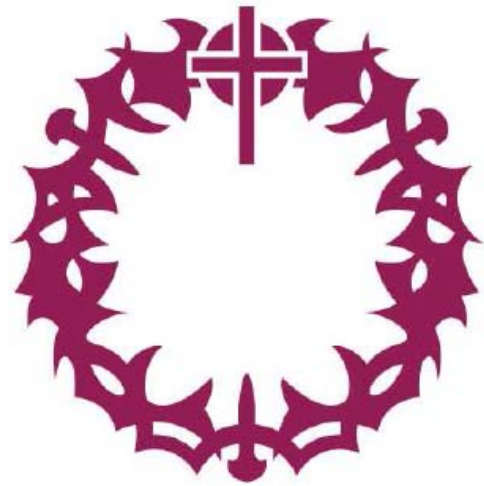


短期留学派遣プログラム
事例紹介



桜美林大学
J. F. Oberlin University

「国際協力フィールドワーク」
「国際協力研修」

リベラル・アーツ学群国際協力専攻／
基盤教育院フィールド教育部門
向井一朗

桜美林大学の人材育成目標

キリスト教精神に基づいた
教養豊かな国際的人材の育成。

桜美林学園のモットー — 特徴的取組み

「学而事人」

(がくじじじん)

学んだことを人々や社会
のために役立てる。

多彩な留学プログラム
フィールド教育の充実
サービス・ラーニング

「国際人」育成のための 多彩な留学プログラム

長期プログラム

1年間または1学期間
全学群対象
単位認定
(2013年度54名)

グローバルアウトリーチ プログラム

1学期間 LA/BM学群 (語
学・奉仕活動・就業体験)
単位認定
(2013年度214名)

短期プログラム

夏休み・春休みなど
全学群対象
単位認定
約30プログラム
(2013年度360名)

国際協力研修
3プログラム('12)
国際協力FW
2プログラム('13)

「国際協力研修」

2011 53名
2012 42名
リピート14%

2012年度まで基盤教育院フィールド科目として実施
渡航先:フィリピン(夏休み)、

インド(春休み)、バングラデシュ(春休み)

全学群全学年対象 2単位+自主研究2単位

「国際協力フィールドワーク」

2013 39名
リピート20%

2013年度からLA学群国際協力専攻科目として実施
渡航先:フィリピン(夏休み)、アフリカ(春休み)

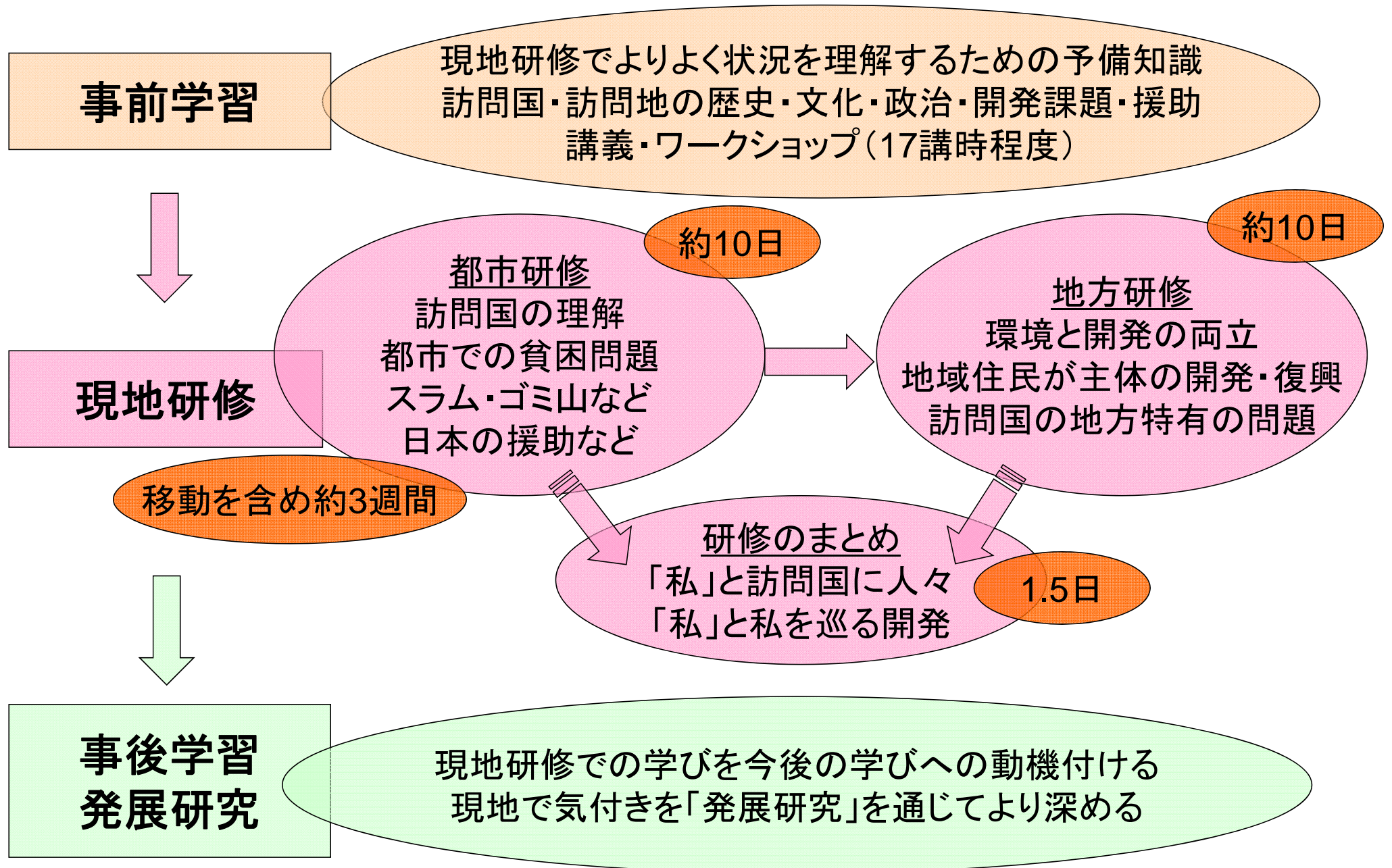
全学群2学年以上対象 4単位(発展研究必須)

研修目的

履修者に以下の気づきや考えを促し、今後国際的な視野に立って行動するきっかけをつかむ。

1. 知識として知っている、「開発途上国」の現状や課題について、現地に赴き、自らの五感を使って新たに感じ・気づき・考える。
2. 現場で開発を取り巻くさまざまな人々に出会い・話し、また自ら現場を体験することにより、「国際協力」や「開発」を取り巻く現状・諸問題に気づき・考える。
3. 「開発途上国」の現状や課題を、日本に住む「わたし」が、
遠い国の他人事ではなく、同じ地球に暮らす一人とひとりとして「自分事」として捉える視点を養う。
4. その上で、「わたし」が、「開発途上国」に暮らす人々と、これからどのように関わるべきかについて考え、行動するきっかけをつかむ。

研修の構造



プログラム構成の基本的考え方

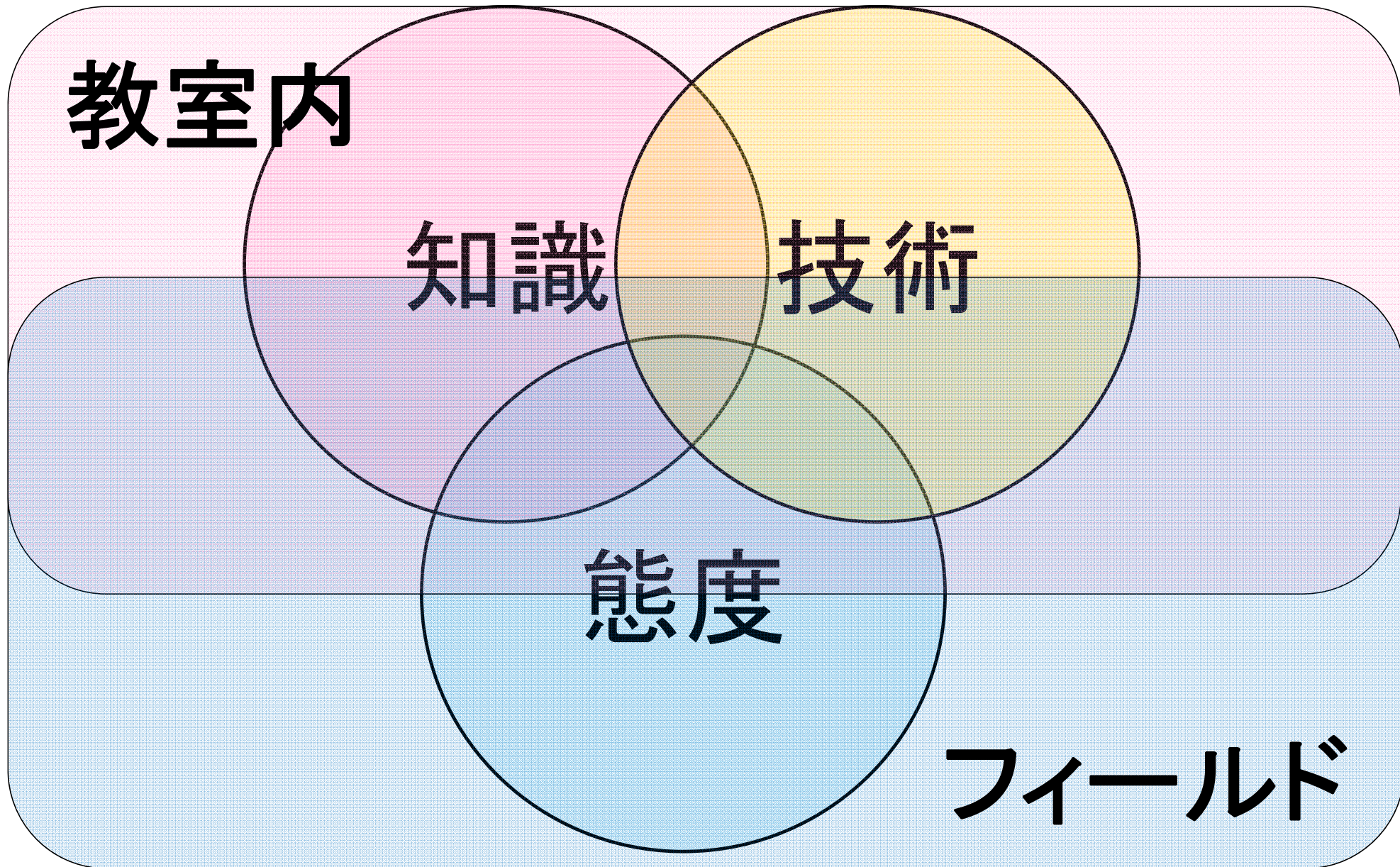
教室内

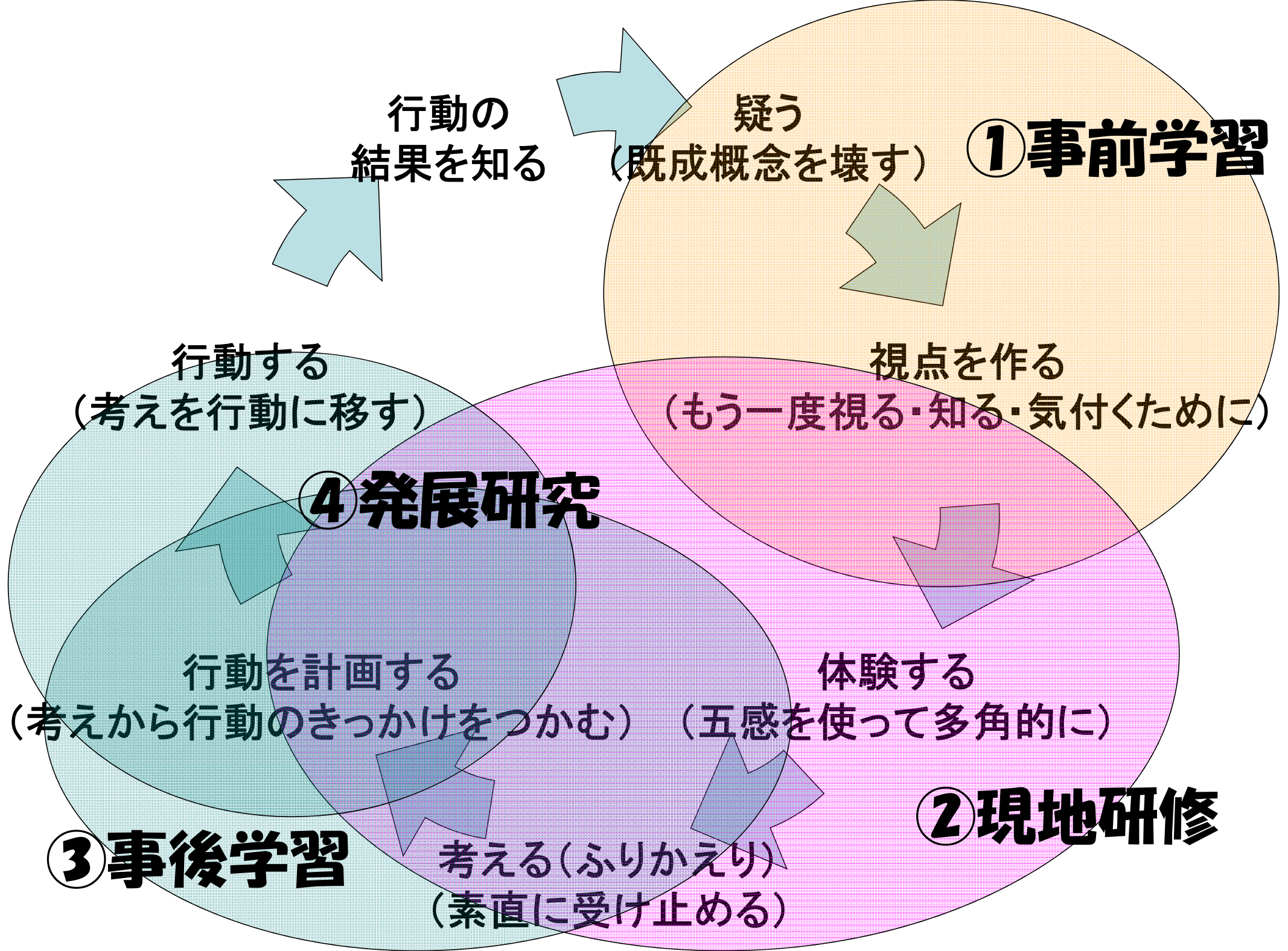
知識

技術

態度

フィールド





事前学習内容(1)

既成概念を崩す、
再構築のための感情の揺さぶり
他者との討論
多彩な視点・立場への気づき

- 「開発」の概念を問うワークショップ
- 「課題」のつながりを考えるワークショップ
- 私たちと「途上国」のつながりワークショップ
- 「開発」への参加を考えるワークショップ
- 「貧困」を考えるワークショップ

事前学習内容(2)

現地を「体験」するための知識
各自の視点・興味の形成
自らとのつながりに気づく

- 「訪問国の歴史・社会・産業など調べ学習
- 訪問国の「課題」調べ学習
- ゲスト講義「現地の課題関連・活動体験談」
(フィリピン:従軍慰安婦、ウガンダ:農業など)
(協力隊体験談など)
- ODAなど国際協力事業講義

事前学習内容(3)

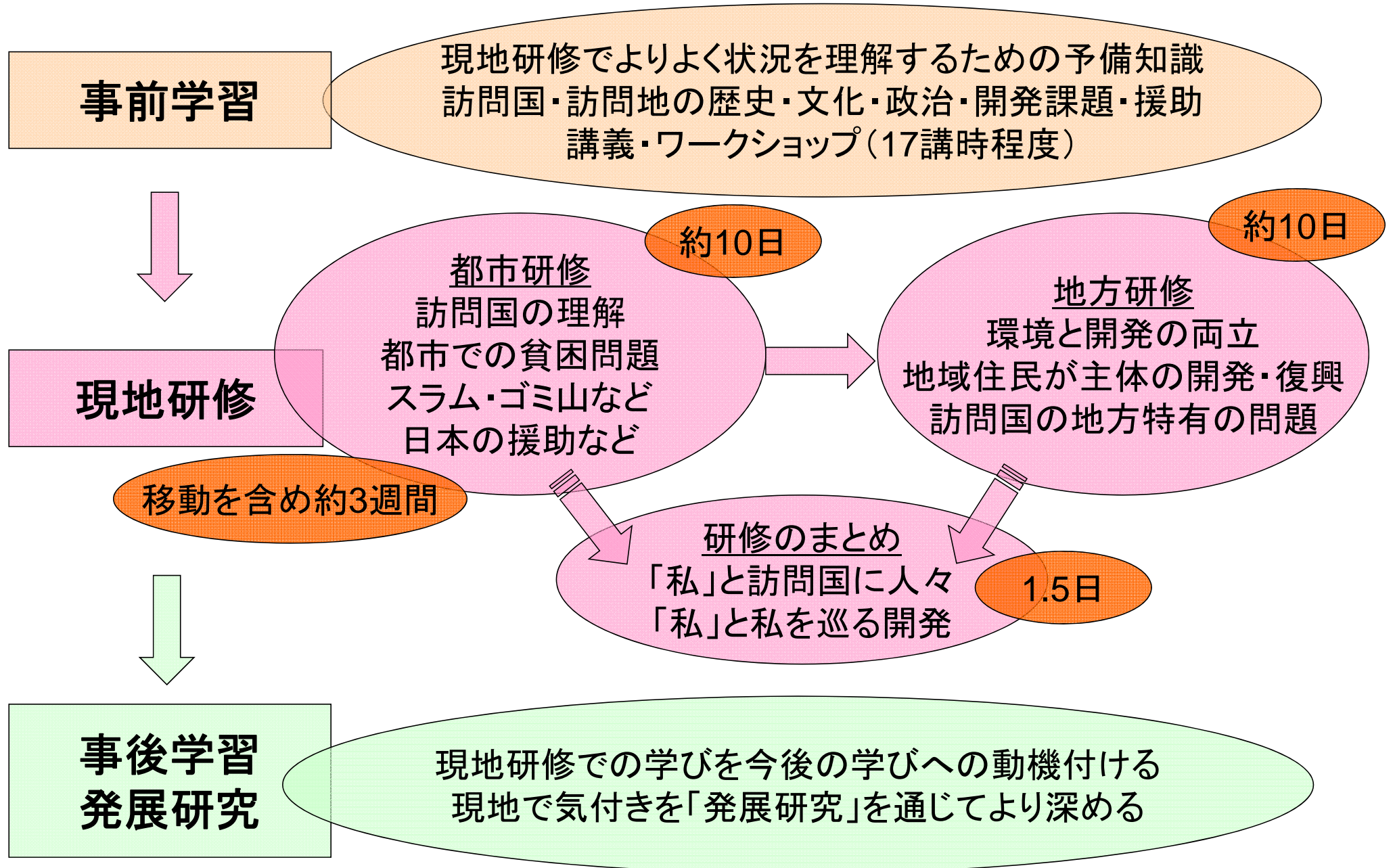
学生チームの構成

本音で語り合うためのアイスブレイク

留学生活への備え

- 交流準備
- 合宿
- 渡航手続き、健康管理・安全管理
- 危機管理セミナー(全留学プログラム対象)

研修の構造



事後学習内容

体験の定着

新たな「もやもや」

今後への動機付け

- 日程ごとのポイントの再整理
- 自らの体験からキーワードを抽出
- 自らの「夢」とそれに向かっの計画
- 発展研究課題の設定
- 日本の問題との関連付け(講義・ワークショップ)

自尊感情の形成

他者の受容

自己の受容

多様な考え

多様な視点

多様な感じ方

固定概念の打破

多様性への
気づき

「常識」への
疑い

自己中心感情から自尊感情に変わると...

自己中心感情



自己犠牲感=慈善
ノブレス・オブリージュ

自己中心な
押し付けに
なりがち



自尊感情



傾聴

共感

シェア
(つながり)

「対等」な
互惠関係